



大和
思想

二章

二章 大和思想が「共存共栄の世の中」を 「理想の世の中」とする理由

目次

序文

「自然」と共存する必要性について

「多様な人間」と共存する必要性について

人類の転換期

まとめ

二章 大和思想が「共存共
栄の世の中」を「理想の世
の中」とする理由

序文

それでは、ここから、二章に入りたいと思います。

一章で説明したように、「大和思想」は、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を「目的」に設定しています。

また、「大和思想」では、「世の中の全ての人と共に幸福になる」ためには、世の中は、『共存共栄の世の中』である必要がある」と考えます。

「共存共栄の世の中」とは、「人間」「動物」「植物」等、「世の中に存在する全ての生物」が共に生き、共に栄える世の中」のことです。

また、それは、「世の中に存在する全ての生物」の『尊厳』が保たれている世の中（全ての生物が、『価値ある存在』『尊い存在』として、認められ、大切にされている世の中）のことです。

人間が「幸福」になるためには、『自分の尊厳が保たれていること』によって得られる『精神的充足、安定』が必要不可欠ですが、このような世の中であれば、世の中の全ての人の「尊厳」は、常に保たれています。

つまり、世の中が「共存共栄の世の中」であれば、世の中の全ての人が、常に「幸福」を感じることができるのです。

ですから、「大和思想」では、『世の中の全ての人と共に幸福になる』ためには、世の中は、『共存共栄の世の中』である必要がある」と考えるのです。

つまり、「大和思想」は、このような理由から、「共存共栄の世の中」を「理想の世の中」としているのです。

さて、「大和思想」は、このような理由から、「共存共栄の世の中」を「理想の世の中」としているのですが、これ以外にも、まだ理由があります。

近年、「生態学（生物と環境の相互作用、基本原理についての科学）」等の研究から、「人間は『自然』と共存して生きていく必要があること」が分かってきました。

また、「人間社会においては『多様な人間』と共存して生きていく必要があること」が分か
つてきました。

また、人類の歴史の流れから、「現在が、『経済や社会を発展させることを優先させる時代』
から『共存共栄の世の中を維持することを優先させる時代』へと『方向転換』すべき、『人類
の転換期』にあること」が分かってきました。

「大和思想」は、これらの理由からも、「共存共栄の世の中」を「理想の世の中」としている
のです。

そこで、二章では、これらについて説明したいと思います。

「大和思想を実践する」上で、「大和思想が『共存共栄の世の中』を『理想の世の中』とする理由」をしっかりと理解することは、とても重要です。

なぜなら、『大和思想』を実践しよう（常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめよう）と思っても、その作業は、常に順調にいくわけではなく、常に、様々な「問題」や「困難」に直面するからです。

「問題」や「困難」に直面したときに、『共存共栄の世の中』を『理想の世の中』とする理由、つまり、『共存共栄の世の中』を實現させる必要性「『共存共栄の世の中』を實現させなければならぬ理由」をしっかりと理解していなかったら、「別に、そこまで頑張る必要はないか」と考えてしまい、それを乗り越えることはできなくなります。

逆に、その必要性をしっかりと理解していれば、「それを實現させる必要がある」「それを実

現させなければならぬ」という「意識」が働くので、くじけず、それを乗り越えることができるのです。

このことから分かるように、「大和思想が『共存共栄の世の中』を『理想の世の中』とする理由」をしっかりと理解することは、「大和思想を實踐する」上で、とても重要なことなのです。

ですから、これから説明することは、しっかりと理解してほしいと思います。

「大和思想が『共存共栄の世の中』を『理想の世の中』とする理由」をしっかりと理解することは、「大和思想を實踐する」ための、重要な「はじめの一步」なのです。

「自然」と共存する必要性について

それでは、まず、『自然』と共存する必要性』について説明したいと思います。

私達は、普段、あまり意識していませんが、人間は、「自然」から様々な「恩恵」を受けることによって、「生きること」ができています。

例えば、人間は「食料」、木材等の「原材料」、「エネルギー資源」、「自然」が浄化、無毒化を行なった「きれいな水と空気」を「自然界」から得ています。

また、「微生物」「昆虫」「動物」「植物」の働きのおかげで、作物の栽培に必要となる

「土壌の形成」「送粉（花粉を運ぶこと）」「伝染病の防御」、「自然」を維持するために必要となる「種子の拡散」「自然界にある『栄養素』の循環」等が行なわれています。

また、「森林」の機能のおかげで、大雨が降っても「洪水」が制御され、「地滑り」が抑制され、「気候」も一定の範囲内で調整されています。

これらのことから分かるように、私達人間は、「自然」から様々な「恩恵」を受けることによって、「生きること」ができています。

さて、人間は、「自然」から様々な「恩恵」を受けることによって、「生きること」ができていたのですが、近年、人間による環境破壊が進み、「自然」からの「恩恵」が以前のように受けられなくなったり、環境破壊が原因による大規模な「災害」が、たびたび起こったりするようになってしまいました。

例えば、「森林」には、本来「保水機能」があり、大雨が降っても「森林」から川に流れ出る水の量が調節されるので、「森林」があれば「洪水」の発生を抑えることができます。

また、「森林」があれば、雨が直接地面にぶつかることを防げるので、「土壌の浸食」や「地滑り」の発生を抑えることもできます。

ですが、無計画な森林伐採によってそれらの機能が失われ、以前は起こらなかったような、大規模な「洪水」や「土砂災害」が、たびたび起こるようになってしまいました。

そして、ときには多くの尊い命が失われ、被害総額も莫大なものになってしまいました。

私達は、自分達の手で「自然」を破壊し、ついには「自然」から「恩恵」ではなく、「災害」を受けることになってしまったのです。

ですが、近年、このような経験や「生態学」等の研究から、「人間が『自然』と共存して生きていく必要があること」が明らかになってきました。

例えば、作物を栽培するためには、「自然」や「多様な生物」と共存する必要があることが分かってきました。

作物によっては、「ハチ」が「送粉」しなければ結実できず、収穫できないものがあります。この場合、農地の周辺に、「ハチ」が巣を作るのに適した「森林」が必要ですし、「森林」があっても、農地までの距離が遠すぎたら、農地までやってくる「ハチ」の数が減るため、収穫量に影響が出ると言われています。

つまり、この場合、人間は作物を栽培するために、「ハチ」と「森林」と共存する必要があります。

るのです。

また、「森林」は、「害虫を捕食する『昆虫』や『鳥』の住処」でもあるため、農地の周辺に「森林」があった方が、害虫からの防除効果が高いと言われています。

また、作物を栽培する上で重要となる「畑の土」をいい状態にするためには、様々な「微生物」の働きが必要であることが分かっています。

「豊か」と評価される「土壌」の中には、一グラム当たり、一兆個を越す「微生物」がいると言われているのです。

このようなことから、作物を栽培するためには、「自然」や「多様な生物」と共存する必要があることが分かってきたのです。

また、人間が生きるため、人類を存続させるためには、「大規模な自然災害」に対処し、「地球規模での環境の変化」に対応する必要がありますが、そうする上でも、「自然」や「多様な生物」と共存する必要があることが分かっています。

地球上に「多様な生物」が存在している方が、『気候』や『環境』が変化するスピードは遅いと言われていますし、逆に、何らかの「災害」後の荒れ地を元の状態に戻すときは、「多様な生物」が存在している方が、「回復するスピード」は速いと言われています。

また、人工的に大規模な自然災害を制御するより、「森林」等の「自然の力」を利用して制御する方が、費用が抑えられることが分かっています。

また、「森林」をいい状態に保つためには、「森林」に、「微生物」「昆虫」「動物」「植物」等、「多様な生物」が存在している必要があることも分かっています。

このように、「大規模な自然災害」に対処し、「地球規模での環境の変化」に対応する上で、「自然」や「多様な生物」と共存する必要があることが分かっているのです。

また、人類の歴史を見れば分かるとおり、人間は「自然」の中で進化した「生物」なので、近代以降に現れたものである、「大気汚染」「汚染された水」「騒音」「コンクリートやアスファルトに囲まれた自然のない環境」は、人間には馴染みません。

それらは、人間の「精神」や「健康」を害するものであって、「精神」を安定させ、人間を「健康」にするものではないのです。

ですから、心身共に「健康」に生きていくためにも、人間は、「自然」と共存して生きていく必要があるのです。

また、「そもそも『人間社会』が『自然界』の中に存在していること」を忘れてはいけません。

「自然界」の中に、人間が「社会」をつくって生活しているのであって、人間が「自然界」をつくって、その中で動植物が生活しているわけではありません。

また、この「自然界」がある「地球」は、「宇宙」の中に存在している「惑星」です。

つまり、「宇宙」の中に「地球」が存在し、その「地球」の上に「自然界」が存在し、その「自然界」の中に「人間社会」が存在しているのです。

ですから、これらは無関係に独立した存在ではなく、それぞれが互いに影響を与え合い、受け合う関係にあるのです。

ですから、もし「宇宙」に異変が起これば、「宇宙」の中に存在している「地球」はその影響を受けますし、その影響を受けた「地球」で生活している人間も、その影響を受けることになります。

逆に、人間が「科学技術」を乱用し、「自然界」の様々なものを破壊すれば、「生態系」が壊れたり、「大気の状態」や「気候」が極端に変わったり、「地殻の状態」や「地球の運動」が大きく変わったりすることもあります。

そして、その影響で、例えば「地軸」がずれたり、「地球の自転の速度」が極端に変わった、「火山活動」が極端に活発になったりして、「重力の変化」「地球の軌道のずれ」というような大きな変化が起これば、その影響は「宇宙」にまで及んでしまいます。

そして、「地球」や「宇宙」にまで大きな変化が起こってしまったら、その影響は最終的に

は、とてつもない「禍い」となって人間の上に降り掛かってくるのです。

このように、「人間社会」「自然界」「地球」「宇宙」というスケールが大きなものであっても、互いに影響を与え合い、受け合う関係にあるので、人間が生きるため、人類を存続させるためには、むやみやたらと「自然」を破壊するのではなく、「宇宙の生成発展のメカニズム」に則り、その「調和」を保って生きていく必要があるのです。

また、「倫理的観点」からも、人間は、むやみやたらと生き物を殺さず、彼らと共存して生きていくべきだと言えます。

「動物」をよく見れば分かりますが、「動物」にも人間と同じように「感情」があります。そして、彼らも必死に生きようとしています。

そのような生き物を、人間の勝手な都合で殺すのは「いいこと」ではありません。

ですから、「倫理的観点」からも、人間は、自分達の都合だけを考えて生きるのではなく、「様々な生物」と共存して生きていくべきだと言えるのです。

さて、これらことから分かるように、人間は「自然」と共存して生きていく必要がありますし、また、そうするべきなのです。

以前は、多くの人が、木材等の「原材料」、「エネルギー資源」、「きれいな水と空気」等の「自然の恩恵」は、「ただ」で「無限」に手に入ると思っていました。

そして、「工業廃水」や「汚染された空気」をそのまま放出し、無計画に「森林」を伐採し、無計画に生物を捕獲し、殺していました。

ですが、その結果、環境破壊が進み、「自然」からの「恩恵」が以前のように受けられなくなったたり、大規模な「災害」が、たびたび起こったりするようになってしまったのです。

ですが、そのような経験や「生態学」等の研究から、現在では、「人間が『自然』と共存して生きていく必要があること」が明らかになってきたのです。

人間が生きるため、人類を存続させるためには、「自然」と共存して生きていく必要があるのです。

「宇宙の生成発展のメカニズム」を無視し、むやみやたらと「自然」を破壊するという、「世の中の『調和』を無視した生き方」をしていたら、人間は、いずれ、生きることができなくなるのです。

ところで、「自然と共存する」と言うと、人によっては、それは、「ジャングルの中で生活すること」だとか、『人間』と『自然』の間に『対立』が全くない状態のこと」だと思っか
もしれませんが、そういうことはありません。

野生の「動物」は「自然」と共存していますが、それぞれの「動物」は、それぞれの生存に
適した場所で生活しているのであって、わざわざ、住みにくい場所で生活しているわけではあ
りません。

同じように、人間も、「自然と共存する」といっても、わざわざ住みにくい場所に住むので
はなく、人間にとって住みやすい場所に住めばいいのです。

また、「自然界」に、それぞれの生物が生きていくための、生物間の「対立」があるように、人間にも「自然」との「対立」があり、それを完全になくすることはできません。

それでは、「自然と共存する」とはどういうことかというところ、それは、むやみやたらと動植物を殺さない「優しさ」を持ち、「人間は『自然』から様々な『恩恵』を受けることによって『生きること』ができていく」という「自然に対する『感謝』の気持ち」を持って、むやみやたらと「自然」を破壊せず、「自然の調和」を保って生きていくということなのです。

「『自然の調和』が保たれている状態」とは、固定された一定の状態ではなく、常に、少なからず変化している状態です。

この「自然の調和」を保って生きていくのです。

世の中の全ての人が、このような「生き方」をすれば、「人間」と「自然」の「対立」を最小限に抑え、「自然と共存すること」ができるのです。

人間が生きるため、人類を存続させるためには、このように、「自然」と共存して生きていく必要があるのです。

「多様な人間」と共存する必要性について

「大和思想」は、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を「目的」に設定していますが、人間が「幸福」になるためには、『多様な人間』と共存して生きていく「必要があります」。

人間が「幸福」になるためには、「人間社会」は「いい状態（全ての人が『幸福』を感じられる状態）」である必要がありますが、「人間社会を『いい状態』で存続させる」ためには、「多様な人間」が必要になります。

世の中には、自分と違う「考え」の人に対して否定的で、その人を理解しようとしなかったり、その人の「価値」に目を向けようとしなかったりする人がいます。

ですが、同じような「考え」の人からは、同じような「アイディア」しか生まれないので、もし、世の中に同じような「考え」の人しかいなかったら、人間は、「幅の広い活動をする」と「様々な出来事に対処すること」「大きな目的」を実現させること」等ができません。

そして、それらができないので、「人間社会を『いい状態』で存続させること」ができません。

経営学者の P.H.ドラッカーは、次のように言います。

「社会が健全であるためには、そのリーダー的な地位にある者たちが『多元的』であって、『異なる価値観』『異なる優先順位』『異なる方法論』を持たなければならない。常にそこに

は代わりとなるべき『複数のもの』『複数のキャリア』『複数の視点』『複数の行き方』がなければならぬ。さもなければ、すべては画一的となり変革の能力を失う。変革の必要が生じたとき、リーダー的な地位にある者たち全員が当然とすること以外は、考えもつかないことになる」

つまり、「社会」や「組織」を「発展させるため」「様々な『状況』や『環境』の変化に対応させるため」、つまり「人間社会を『いい状態』で存続させるため」には、「多様な感性」「多様な考え」が必要になるのです。

そして、それらは、必要になったときに都合よく得られるわけではないので、それらが必要になる前から、「多様な人間」の存在を認め、彼らを受け入れ、彼らを育てる必要があるのです。

つまり、「人間社会を『いい状態』で存続させる」ためには、「『多様な人間』と共存して

生きていく」必要があるのです。

また、人間が「幸福」を感じて生きていくためには、日々の生活の中に、「娯楽」等の「楽しいと思えるもの」や「楽しいと思える出来事」がたくさんあった方がいいですが、それらをたくさん存在させるためにも「多様な人間」が必要です。

同じような「感性」の人が言う「冗談」は、どれも大体同じですし、同じような「考え」の人が考えだす「遊び」や「娯楽」も大体同じです。

また、世の中に、同じような「感性」や「考え」の人しかいなかったら、毎日の生活が、「驚き」や「発見」のない単調なものになってしまいます。

つまり、世の中に、同じような「感性」や「考え」の人しかいなかったら、世の中は、「楽

しいと思えるもの」や「楽しいと思える出来事」があまりない、「つまらない状態」になってしまうのです。

一人の人間が生み出す「アイディア」には、量的に限界があります。

同じような「感性」の人が生み出す「アイディア」には、「多様性」に限界があります。

ですから、世の中に「楽しいと思えるもの」や「楽しいと思える出来事」をたくさん存在させるためには、「多様な人間」が必要になるのです。

ですから、このことから、人間が「幸福」になるためには、『多様な人間』と共存して生きていく「必要があると言えるのです。

また、人間が「幸福」になるためには、「『自分の尊厳が保たれていること（自分が価値ある存在、尊い存在として、認められ、大切にされていること）』によって得られる『精神的充足、安定』」が必要不可欠ですが、「常に、自分の『尊厳』を保つ」ためには、「常に、誰とも、本質的な部分からは『対立』していない」必要があります。つまり、「『多様な人間』と共存している」必要があります。

もし、「『多様な人間』と共存していない」としたら、それは、「『多様な人間』と『対立』している」ということです。

また、「『多様な人間』が『対立』している」ということは、世の中の全ての人が、「いつ、『争い』に巻き込まれるか分からない状況」にあるということなのです。

世の中が「対立」ばかりで、「いつ、『争い』に巻き込まれるか分からない状況」であったら、人間は「幸福」を感じられなくなります。

ですから、このことから、人間が「幸福」になるためには、『多様な人間』と共存して生きていく」必要があると言えるのです。

さて、これらのことから分かるように、人間が「幸福」になるためには、『多様な人間』と共存して生きていく」必要があるのです。

人は得てして、自分と違う「感性」や「考え」や「能力」を持っている人に対しては、否定的になりがちですが、「自分と違う『感性』を持っている」ということは、「自分には思い付かない『アイディア』や『観点』を持っている」ということですし、「自分と違う『考え』を持っている」ということは、『客観性を得ること』や『自分が知らないことを学ぶこと』ができる」ということです。

また、「自分がない『能力』を持っている」ということは、『自分にはできないこと』ができる」ということです。

ですから、本当は、自分と違う「感性」や「考え」や「能力」の人こそ、「幅の広い活動」を行ない、「様々な出来事」に対処し、「大きな目的」を実現させるためには必要な存在なのです。

「経済」「科学」「学問」等は、様々な「感性」や「考え」や「能力」の人が、それぞれの立場から研究し、議論し、その活動に取り組むからこそ発展します。

「文学」「美術」「音楽」等の「文化」も、様々な「感性」や「考え」や「能力」の人が、自分の「感性」に従って追求するからこそ発展します。

そして、それらを含む「人間社会」も、様々な「感性」や「考え」や「能力」の人がいるからこそ発展し、「いい状態」で存続するのです。

このように、「人間社会」は、「多様な人間」がいるからこそ、「いい状態」で存続できるのです。

そして、「人間社会」が「いい状態」で存続するからこそ、人間は、常に「幸福」を感じることができなのです。

このことから分かるように、人間が「幸福」になるためには、「『多様な人間』と共存して生きていく」必要があるのです。

人類の転換期

「大和思想」は、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」を「目的」に設定し、「『世の中の全ての人と共に幸福になる』ためには、世の中は、『共存共栄の世の中』である必要がある」と考えますが、人類の歴史の流れを見ますと、特に近年は、「『共存共栄の世の中を維持すること』を優先させる時代」へと大きく「方向転換」すべき、「人類の転換期」にあることが分かります。

近年、「科学技術」の目覚ましい発達によって、「生産性」が劇的に向上しました。

そして、1980年代から、世界的に「需要量」と「供給量」が逆転し、現在では、「需要量」より「供給量（生産量）」の方が多くなりました。

この『需要量』より『供給量』の方が多くなったことは、人類にとって、とても大きな意味を持っています。

なぜなら、もし「供給量」より「需要量」の方が多かったら、人間が生きていく上で不可欠な「衣」「食」「住」等の「生活物資」が世の中の全ての人に行き渡らないので、必然的に『生活物資』を手に入れるための争いが起ります。が、「需要量」より「供給量」の方が多ければ、そのような「争い」は起らないからです。

ですから、「生産性」が向上し、『需要量』より『供給量』の方が多くなったことは、人類にとって、とても意味のあることですし、世の中の全ての人にとって、非常に喜ばしいことなのです。

さて、現在は、「需要量」より「供給量」の方が多いため、先進国では「食料」が余り、食べ残しや売れ残りが、毎日ゴミとして捨てられています。

また、「工業製品」も、まだ使えるものでも新しいものに買い替え、それをゴミとして捨てています。

ですが、現実には、世界には「食料」が手に入らず「飢餓」に苦しんでいる人や、「生活物資」が不足し「貧困」に苦しんでいる人がたくさんいます。

なぜそのようなことが起こるのかというと、それは、世の中に『富』や『生活物資』をうまく分配する仕組みがないからであり、なぜその「仕組み」がないのかというと、それは、今の世の中は、『社会』を安定させることより『経済』や『社会』を発展させることを

優先させているからです。

『経済や社会を発展させること』を優先させる」ということは、「『飢餓』や『貧困』に苦しんでいる人を見捨てても、『経済』や『社会』を発展させる」ということです。

ですから、今の世の中には、一部には「食料」や「工業製品」が余っているのに、一部には「飢餓」や「貧困」に苦しんでいる人がたくさんいるのです。

ですが、先ほど説明したように、現在は、すでに「需要量」より「供給量」の方が多いのです。

ですから、地球上にある「食料」をうまく分配すれば、地球上から「飢餓」をなくすことができると言われていきますし、「生活物資」もうまく分配すれば、地球上から極端な「貧困」を

なくすることができます。

また、『経済』や『社会』を發展させること」より『社会』を安定させること」を優先させると、必然的に『経済』や『社会』が發展する速度」は遅くなりますが、現在は「生産性」が向上しているので、たとえ『経済』や『社会』が發展する速度」が遅くなっても、『社会』を安定させること」は十分可能なのです。

ですから、これからの時代は、『経済』や『社会』を發展させること」よりも、『社会』を安定させること（『共存共栄の世の中』を維持すること）」を優先させるべきなのです。

つまり、このことから、「現在の人類は、『経済や社会を發展させることを優先させる時代』から『共存共栄の世の中を維持することを優先させる時代』へと『方向転換』すべき時期にある」と言えるのです。

また、『『共存共栄の世の中を維持すること』を優先させる時代』へと「方向転換」すべき、別の理由もあります。

「科学技術」の発達は、「需要量」より「供給量」を多くするという、人類にとって非常に喜ばしい結果をもたらしましたが、その一方で、非常に悲しい結果ももたらしました。

最先端の「科学技術」は「軍事兵器」にも利用されているので、「最新兵器」の威力が非常に高まってしまい、今ではその威力が、地球を破壊し、人類を滅亡させることができるほどになってしまったのです。

「地球を破壊できる量の核兵器」「地球を破壊できるほど強力な地震兵器」「人類を滅亡させることができるほど強力な化学兵器」等、「地球を破壊すること」「人類を滅亡させること」ができるほど強力な「兵器」が、今の地球上にはたくさんあるのです。

「科学技術」は「両刃の剣」なので、正しいことに利用すれば「社会」を安定させ、人類に「幸福」をもたらしますが、間違ったことに利用すれば、「社会」の秩序を乱し、人間を「不幸」にします。

意図的でなくても、「自然」を破壊することに利用すれば、「自然」はどんどん破壊されま
すし、「社会」の秩序を乱すことに利用すれば、「社会」の秩序はどんどん乱れてしまうので
す。

「人類が『高度な文明』を手に入れる前の世界」や、動植物のみの「自然界」は、全ての生物
が必死に生きる結果として「世の中の調和」が保たれています。

ですが、現在ほど「科学技術」が発達した世界においては、人間が自分達の「意志」で、し

つまり『世の中の調和』を保つ努力」をしなければ、「世の中の調和」は保てないのです。

それどころか、へたをすると、地球そのものを破壊し、人類を滅亡させてしまうこともあるのです。

ですから、これからの時代は、「無計画に『科学技術』を進展させ、利用する」のではなく、『世の中の調和』を保つため、「『共存共栄の世の中』を維持する」ために、「科学技術」を進展させ、利用しなければならぬのです。

このことから分かるように、現在の人類は、「無計画に『科学技術』を進展させ、利用する時代」から『共存共栄の世の中』を維持するために、『科学技術』を進展させ、利用する時代」へと、「方向転換」すべき時期にあるのです。

つまり、このことから、「現在の人類は、『経済や社会を発展させることを優先させる時代』から『共存共栄の世の中を維持することを優先させる時代』へと『方向転換』すべき時期にある」と言えるのです。

さて、これらのことから分かるように、現在は、『経済や社会を発展させること』を優先させる時代』から『共存共栄の世の中を維持すること』を優先させる時代』へと「方向転換」すべき、「人類の転換期」にあるのです。

以前は、「供給量」より「需要量」の方が多かったので、「共存共栄の世の中」を実現させようと思っても、不可能だったかもしれない。

ですが、現在は、「需要量」より「供給量」の方が多いので、『共存共栄の世の中』を実現させること』は可能なのです。

また、「科学技術」が目覚ましく発達したことによって、現在は、「無計画に科学技術を
発展させ、利用すること」ができない状況」になったのです。

つまり、「『共存共栄の世の中』を維持するために、『科学技術』を発展させ、利用しな
ければならない状況」になったのです。

ですから、人類は、「『経済や社会を発展させること』を優先させる時代」から『共存共
栄の世の中を維持すること』を優先させる時代」へと、大きく「方向転換」すべきなのです。

「需要量」より「供給量」の方が多くなったのに、「飢餓」や「貧困」に苦しんでいる人を犠
牲にしてまで「経済」や「社会」を発展させることに、何の意味があるのでしょうか？

人類を滅亡させる危険があるのに、無計画に「科学技術」を発展させ、利用するのは、「正

しい判断」なのでしょうか？

それは、「人類のあり方」として、明らかに間違っているのです。

『需要量』より『供給量』の方が多くなった時点」が、また、「科学技術の発達によって、『人類が滅亡』する危険性』が高まった時点」が、人類が大きく「方向転換」すべき時点なのです。

『経済や社会を発展させること』を優先させる時代」は、すでに過ぎ去りました。

現在は、すでに、「『共存共栄の世の中を維持すること』を優先させる時代」になったのです。

まとめ

それでは、ここで、二章の「まとめ」をしたいと思います。

二章では、「大和思想が『共存共栄の世の中』を『理想の世の中』とする理由」について説明しました。

「大和思想が『共存共栄の世の中』を『理想の世の中』とする理由」は、「世の中が『共存共栄の世の中』であれば、世の中の全ての人が、常に『幸福』を感じることができるから」です。

一章では、このような説明をしましたが、これ以外にも、まだ理由があります。

近年、「生態学」等の研究から、「人間は『自然』と共存して生きていく必要があること」が分かってきました。

人間は、「食料」を「自然界」から得ていますし、作物を栽培するためには、「様々な生物」の働きが必要になります。

また、人間は、木材等の「原材料」、「エネルギー資源」、「きれいな水と空気」を「自然界」から得ています。

また、「自然」を破壊し過ぎると、場合によっては、地球規模での環境の変化が起こり、人間は生きることができなくなります。

また、むやみやたらと生き物を殺すのは、「倫理的」に間違っています。

これらのことから分かるように、人間が生きていくため、人類を存続させるためには、「『自然』と共存して生きていく」必要がありますし、また、そうするべきなのです。

ですから、「大和思想」は、このような理由からも、「共存共栄の世の中」を「理想の世の中」としているのです。

また、「人間が『幸福』になるためには、『多様な人間』と共存して生きていく必要があること」も分かってきました。

もし、世の中に、同じような「考え」の人しかいなかったら、人間は「幅の広い活動をする

こと」「様々な出来事に対処すること」「『大きな目的』を表現させること」ができないので、「人間社会を『いい状態』で存続させること」はできません。

また、人間が「幸福」を感じて生きていくためには、日々の生活の中に、「楽しいと思えるもの」や「楽しいと思える出来事」がたくさんあった方がいいですが、それらをたくさん存在させるためには、「多様な『感性』の人」「多様な『考え』の人」が必要になります。

また、『多様な人間』が共存していない」ということは、『多様な人間』が『対立』している」ということなので、もし、いつまでも「多様な人間」が共存しなかったら、いつまでも、世の中から「対立」はなくなりません。

そして、いつまでも「対立」がなくならないので、人間は、いつまでも「幸福」になれません。

これらのことから分かるように、「人間が『幸福』になるためには、『多様な人間』と共存

して生きていく」必要があるのです。

ですから、「大和思想」は、このような理由からも、「共存共栄の世の中」を「理想の世の中」としているのです。

また、人類の歴史の流れから、「現在が、『経済や社会を発展させることを優先させる時代』から『共存共栄の世の中を維持することを優先させる時代』へと『方向転換』すべき、『人類の転換期』にあること」が分かってきました。

現在は、「科学技術」の目覚ましい発達によって「生産性」が上がり、「需要量」よりも「供給量」の方が多くなりました。

つまり、『世の中の全ての人に生活物資を行き渡らせること』ができる時代』『共存共栄の世の中を実現させること』ができる時代』になりました。

また、その一方で、「科学技術」は、それを無計画に発展させ、利用したら、地球を破壊し、人類を滅亡させてしまうほどに発達してしまいました。

このように、現在の「科学技術」は、『共存共栄の世の中を實現させること』ができるほどに、また、『無計画に発展させ、利用することができないほど』に発達したのです。

つまり、現在の人類は、『経済や社会を發展させることを優先させる時代』から『共存共栄の世の中を維持することを優先させる時代』へと『方向転換』すべき状況に立たされたのです。

ですから、「大和思想」は、このような理由からも、「共存共栄の世の中」を「理想の世の中」としているのです。

さて、このように、人間が生きていくためには『自然』と共存して生きていく必要がある。必要があり、人間が「幸福」になるためには『多様な人間』と共存して生きていく。必要があり、現在の人類は、『経済や社会を発展させること』を優先させる時代から『共存共栄の世の中を維持すること』を優先させる時代へと「方向転換」すべき、「人類の転換期」にあるのです。

ですから、「大和思想」は、これらの理由からも、「共存共栄の世の中」を「理想の世の中」としているのです。

「大和思想が『共存共栄の世の中』を『理想の世の中』とする理由」は、単に、「それが理想的だから」ではありません。

「『世の中の全ての人々が幸福になる』ために必要だから」「本気で取り組みれば実現可能だから」「リスクを考えると、実現させる必要があるから」なのです。

「『世の中の全ての人々が幸福になる』ために必要」であり、「本気で取り組みれば実現可能」であり、「リスクを考えると、実現させる必要がある」にもかかわらず、「共存共栄の世の中」を「理想の世の中」としなないとしたら、私達は、一体、どのような世の中を「理想の世の中」とするのでしょうか？

「『世の中の全ての人々が幸福になる』ために必要」であり、「本気で取り組みれば実現可能」であり、「リスクを考えると、実現させる必要がある」のですから、私達は、「共存共栄の世の中」を「理想の世の中」とするべきなのです。

そして、今すぐにでも、「共存共栄の世の中」を実現させるべきなのです。

二章では、このことをしっかり理解してください。

「大和思想が『共存共栄の世の中』を『理想の世の中』とする理由」をしっかりと理解することができれば、どのような「問題」や「困難」に直面しても、それを乗り越え、「普段自分が関わっている『全体』をまとめること（『大和思想』を实践すること）」ができるのです。



大和
思想

二章